

## 『abさんご』実施レポート

### 1. 事業概要

黒田夏子の芥川賞受賞作品『abさんご』を、現代演劇の演出家（西尾佳織）× コンテンポラリーダンスのダンサー（木村愛子、増田美佳）× 能役者（清水寛二）が上演。ドラマトゥルクには、能狂言研究家の小田幸子と、小説家、批評家、編集者、デザイナーでいぬのせなか座主宰の山本浩貴。

『abさんご』の物語はシンプルだ。登場するのは「子」「親」「家事がかり」の三人。親と二人きりの水入らずで暮らした子の幸福な幼少期に、よそもの家事がかりが現れて親子の蜜月が終わり、戦後の混乱と経済的逼迫により生活が徐々に傾き、やがて家事がかりが親の配偶者の地位を得て親の死ぬまでが、時系列の順はバラバラに、回想の形で描かれる。

全15編の断章で構成される『abさんご』から、今回は〈解釈〉の一編を取り上げた。

まず関連企画として、研究会「能における曖昧な主体」を10月19日（日）に浅草駒形会議室にて実施。本企画ドラマトゥルクの小田を講師とし、能の主体についてのレクチャーとディスカッションを行った。

公演では、初めに旧平櫛田中邸の茶の間にて、ドラマトゥルク山本による小説『abさんご』の作品背景についてのレクチャーと、観客自身に『abさんご』のテキストを味わってもらう時間（約30分）を設けた。その後、かつて平櫛田中氏が彫刻創作を行ったアトリエ空間に移動して、上演（約45分）を行った。

### 2. 企画のねらい

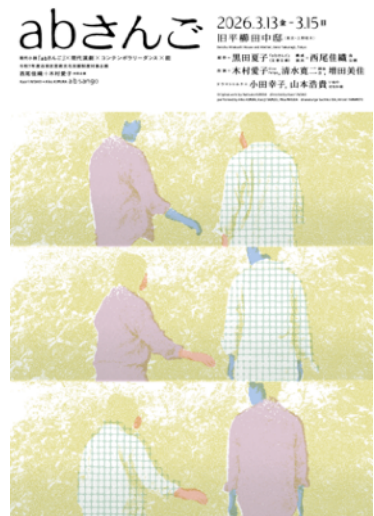
**おもてぐちがしまっていたので建てもののうらがわにまわっていった者は、かつて埋めた食べがらのしんが果樹となつてほそい幹ながら十七さいのたけをはるかにこえたあたりに白い花冠をともしているのや、使うのをやめてひさしい戸外での煮炊き装置にさしかけられた仮屋根の、いつの秋からともしれない朽ち葉の積もりなどめぐりあった。**

黒田夏子『abさんご』〈解釈〉より

『abさんご』という小説の特徴は、なんと言っても主語（主体）の扱われ方（というか正確には、クッキリ扱わないようにするやり方）にある。どういうことかと言うと、「誰が」が文の起点になっていない。

私たちは一般的に、「誰が+どうした」つまり「主語が+述語した」という形式の文に慣れていると思うのだが、『abさんご』においては、「おもてぐちがしまっていたので建てもののうらがわにまわっていた者は」といった調子で、主語が述語（動詞）の集積として現れてくる。つまり物語が、人間を基準とするのではなく、出来事の側から書かれているのだ。

この『abさんご』の語りに、能の地謡との近似性を感じた。『abさんご』においては、文が主語を起点にするのではなく、出来事の側から書かれることで、〈出来事〉が複数の視点のあいだに浮かび上がってくる。同じことが能の地謡においては、語りの主体を不特定のまま保留しておくことでなされている。



「主語が+述語した」形式で書かれない『abさんご』の文体に、戸惑う人も少なくはないだろう。でも本当は、こちらの方が生きものの本来見ている世界だったのではないだろうか？

例えばGoogleMapsを使って、私たちは自分の身体を離れた上空から鳥観図的に世界を把握して、目的地とそこまでのルートを把握してから動くことに慣れてしまっている。でも現実には、地に足のついた虫の目で、咲く花を見上げたり、そこに射す光を感じたり、ふと立ちのぼった匂いから急に遠い記憶が蘇ったり、そうした瞬間瞬間の相互性の中で世界を把握しているのではないか？

『abさんご』の物語を、誰か一人の記憶としてではなく、複数の人間や自然、風景が相互にかかわり合う間の出来事として立ち上げたいと思った。そのために、一人ひとりの出演者が特定のキャラクターを演じる形式は採らず、『abさんご』のテキストを3人の出演者で分け持って語る声・言葉のタイムラインと、発語される言葉と近付いたり離れたたりしながら存在する身体のタイムラインをつくり、その二本を同時に流す上演方法を選んだ。

上演台本としては、〈解釈〉の短いテキストを三巡し、そのくり返しの中で同じ出来事が少しずつ違った視点から立体的に見えてくるように構成した。

### 3. 開催概要

#### ① 研究会「能における曖昧な主体」

日時：2025年10月19日（日）

場所：浅草駒形会議室 参加料：500円

参加者数：一般11名、招待3名、関係者4名の計18名



浅草駒形会議室

#### ② 公演『abさんご』

日時：2026年3月13日（金）～3月15日（日）

3/13（金）12:00

3/14（土）12:00／15:00

3/15（日）12:00／15:00（全5回公演）

場所：旧平櫛田中邸アトリエ チケット：2500円（一般・立ち見共通）

入場者数：一般135名、招待28名、関係者20名の計183名（加えて、ゲネプロは関係者10名が鑑賞）

### 4. 記録写真

●●●●●テキストを味わう会●●●●●



●●●●●アトリエ空間での上演●●●●●



クレジット：ulin miula

## 5. 事業の反響

公演の3ヶ月前にチケットを発売し、そこから約1ヶ月で5ステージ分が完売した。公演の2週間前に立ち見席を追加販売したが、そちらも2日で完売した。

- ・公演自体も、全体的に非常に好評だった。好感を得ていた点として、
- ・ドラマトウルク山本による鑑賞前レクチャー＋上演という企画の構成
- ・一般に難解と言われることの多い『abさんご』が、テキストを三巡する構成・演出と、コンテンポラリーダンサーと能役者の身体表現により、自然と入ってくる上演になっていたこと
- ・平櫛田中邸の空間自体の良さと、それが作品内容と重なって、上演効果にも大きく寄与していたことなどが挙げられる。

観客層としては、文学／演劇／ダンス／能の観客が混ざっていたように思われる。年代も高校生から70代まで幅広く、普段の公演よりも年齢層高めのお客様に多くご来場いただけた。

元々『abさんご』の熱心な読者だった方々からは、「小説から舞台へとメディアムが変わっているのに（変わったことで？）、自分が小説を読んだ際の体感がそのままに、より広がって得られるように感じられた」等、熱いご感想をいただいた。また逆に、小説の『abさんご』は難解だと感じていた方々からも、「こういう作品だったのかと腑に落ちた」「リアリズム演劇のような表現ではなく、ダンサーと能役者による発語＋身体表現だったことで、テキストを読み進めながらそれが風景として同時に立体化されていくような、不思議な味わいだった」等のご感想をいただいた。

アンケートでは、「今後、この取り組みが続くならぜひ観たい」が78.6%、「条件によっては見たい」が21.4%で、今後の展開にも期待を寄せていただいていることが分かった。

## 6. アドバイザー等からの助言、支援制度を受けてプラスになったこと（抜粋）

審査の段階でアドバイザーから「音楽はどうなるのか？」とご質問いただき、当初は使用しない予定だったが、検討の上でカリンバの音色を取り入れて、非常に良い上演効果となった。

また、チラシ作成時には地図を分かりやすくした方がいいとご指摘いただいた。特に今回は、能の観客層の方など普段の公演とは異なる年齢層のご来場も期待されるということで、スマホ頼みではなく地図のみでたどり着けるようにした方がいいというご指摘は有難かった。

台東区の町会の掲示板や区内施設にチラシを配架していただき、区の広報紙やHP、SNSに情報を掲載していただくこともできた。アンケートから分かる数だけでも、区内で配架していただいたチラシをきっかけにご来場くださった方が約14%いて、自力ではアプローチできない地元のお客さんに広報ができた。

原作：黒田夏子『abさんご』（文春文庫）

構成・演出 | 西尾佳織（鳥公園）

出演 | 木村愛子（Eine Feige）、清水寛二（鍔仙会）、増田美佳

ドラマトウルク | 小田幸子、山本浩貴（いぬのせなか座）

空間構成 | 中村友美

宣伝美術 | 鈴木哲生

運営 | 青田亜香里

進行・広報管理 | 奥田安奈・五藤真

企画協力 | 文藝春秋

助成 | 令和7年度台東区芸術文化支援制度、公益財団法人セゾン文化財団

主催 | 西尾佳織（鳥公園）、木村愛子（Eine Feige）

お問い合わせ：[absango.project@gmail.com](mailto:absango.project@gmail.com)

鳥公園HP：[bird-park.com/works/absango](http://bird-park.com/works/absango)

木村愛子HP：[kimuraaiko.com](http://kimuraaiko.com)